

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

群青の朝に咲きけり蓮の花

長岡市 勝沼 幸子

△評「群青の朝」と言い切ったのがすがすがしい。日本画を見るような色調の中に、ハスの花が気高く浮かび上がる。

炎屋や伊賀鉄道の無人駅

伊賀市 福沢 義男

△評「こんなローカル線は地方のどこにでもありそうだが、伊賀の地名がイメージを広げる。ハモニカに姉の口紅夏の月

下野市 石井 光

緑陰に胸の釦をはづしをり

豊橋市 岡野寛十郎

風呂洗ふ半裸の男不死男の忌

尼崎市 森下久美子

遮れるものなき天や月涼し

福岡市 松尾 ねこ

子の尻のひときわ白し休暇明

国分寺市 野々村澄夫

茅の輪くぐる母のスカート握りしめ

福山市 井上 弘子

ちりぢりになりし朋が柿若葉

帯広市 柏木 七歩

スカイツリー下界の暑さ眺めけり

姫路市 宗平 真実

西村 和子 選

糊付けもねんごろなるや落し文

大阪 池田 壽夫

△評「葉の曇り方も丁寧である」とを「も」が語る。造化の神のこまやかな仕事に対する感嘆が、切れ字にこめられている。

食べられますと言はれても梅雨昔

和歌山 神野 一馬

△評「語順を変えれば音韻は整うが、句またがりによってためらいの思いが表れて、効果的な叙法。町の音消ゆる盛夏の日曜日

大阪市 木挽 弘志

東京に砂漠の匂ひ風灼くる

笠間市 伊藤 邦夫

覚めて寝て時計たしかめ熱帯夜

明石市 吉室 奨

鬼灯のしたたか濡れて市の朝

東京 鈴木 智子

飛び立つに一拍おいてんとむし

東京 野上 卓

夏安居もあけたるころか街に僧

東京 鮑谷 定幸

助手席に抱かされてをり大西瓜

葛城市 八木 誠

手招きをするかに烏瓜の花

相模原市 はやし 央

井上 康明 選

銀漢や千年結ぶ塩の道

市川市 高野 厚夫

△評「空に天の川の星が煙り、地上に平安時代から千年の塩の道が通う。天の川の七夕の印象が人々の往来を思わせる。

大粒の星が消えゆく我鬼忌かな

相模原市 小山 鞠子

△評「我鬼忌は芥川龍之介忌、7月24日。大きな星が消えてゆく夜明けに文豪への思いを募らせる。十人のラジオ体操白木樞

奈良市 上田 秋霜

炎天の黙禱八時十五分

東京 徳原 伸吉

氷旗水平線に傾けて

宇陀市 泉尾 武則

恐竜の現れさうな夏休

相模原市 はやし 央

棲み古りし墓か庭草揺れてをり

鎌ヶ谷市 佐藤 紀子

本棚の古びし聖書草田男忌

鎌倉市 前川 卓

べつたりと背中に土や宮相撲

岸和田市 妙中 正

爽やかや東京の師の弾むこゑ

甲府市 清水 輝子

片山由美子 選

百日紅池に映りて池に散る

川口市 高橋さだ子

△評「サルスベリは花期が長い、新しい花が毎日咲いては散っているのだ。池の上にせり出した大きな木の姿が目につく。

炎天のわが影われを支へをり

平塚市 門脇 明子

△評「影が自分を支えているというが、じつは暑がるものが何もないのである。暑さの極まる時。白百合を何も無き日の妻に買ふ

横浜市 菅沼 葉二

長旅の終りを惜しむ晩夏かな

相模原市 はやし 央

早起きのピアノの音や夏休み

奈良市 奥田 誠

音立てて回るや通夜の扇風機

武蔵野市 渡辺 一甫

幾たびも流灯の子を押し戻し

川越市 益子さとし

目隠しの扉より高く立葵

鎌倉市 海野 公生

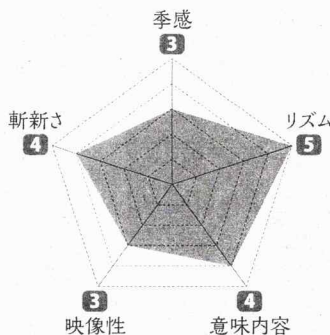
一杯で終はらぬ父のビールかな

東京 徳原 伸吉

病院を出つればわつと蟬時雨

芦屋市 水越 久哉

チャートで採点



注目的一句
向日葵やお喋り好きは寂しがり

冬すみれ

円堂実花

アプリ「俳句てふてふ」で週間ランキング1位を獲得した「季節向日葵」の一句。夏を代表する花のひとつで、ウクライナの国花であることから、戦争と取り合わせて詠まれることが増えました。「あなただけを見つめる」という花言葉は、その屈光性はもちろん、太陽神アポロンへの恋に破れたニンフがこの花になったという伝説とも関係していると言われます。

掲句は他の季節語でも成立しそうですが、やはり向日葵がしっくりくるように思います。明るく社交的だけれど寂しがりやでもある人物と、華やかで生命力を感じさせる見た目だけれど戦争やかなわぬ恋のイメージもある花を重ねあわせたのではないのでしょうか。

(えんどう・みか 俳人)

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句てふてふは富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら